

# 学会報告

## 日本リスク研究学会第15回研究発表会

佐藤 京子

平成14年11月22～23日の2日間、京大會館（京都市）において、日本リスク研究学会第15回研究発表会が開催された。

当学会は、高度産業技術社会を迎えてその原動力となった科学・技術の開発に関する様々なるリスクに対し、環境、公衆衛生といった個別分野ごとではなく学際的でかつ国際的な視野をもったリスク分析とリスク管理の研究の相互理解と協力を促進するため、1988年に設立され、米国に本部をもつSRA（The Society for Risk Analysis）の日本支部として活動している。毎年この時期に研究発表会が開催されている。

当学会では、リスクに関係が深い個別分野の多さ（例えば、防災、環境汚染、公衆衛生、医療、保険、化学物質等）を反映し、大学に在籍する心理学、生物学、化学、工学、医学等の広範な分野で活躍する研究者に加え、一般企業、民間シンクタンクから多くの者が会員となっている。

今次研究発表会は、上述のこれまでのリスク研究に加え、最近BSEやO157など食品安全に関する話題が増えていること、「特定化學物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律（PRTR法）」の施行に伴う環境リスク評価が試みられることを踏まえ、食の安全とリスク管理、PRTRのリスクコミュニケーションが、それぞれ企画セッションとして設けられたことが特徴である。

発表会は、個別報告が行われる三つの一般セッション、四つの企画セッションの他に、

食品と環境のリスク研究に絡んで、日本学術会議環境保健学研連との共催で、特別シンポジウム「遺伝子組み替え食品から食の安全性と環境を考える」が最終日の午後に開催された。

筆者が聴講した一般セッションでは、防災や放射線に関するリスク認知の形成要因の分析、慶應大学研究チームによるWebを利用したリスクコミュニケーション手法の開発等リスクコミュニケーションに関する基礎研究および応用研究に関する発表が多くかった。Webを利用したリスクコミュニケーション研究は、いずれも実用化には至ってはおらず、試行的にシステムを稼働している段階であるが、多人数の参加と大容量の情報共有・交換を可能にする手法の実用化に向けての今後の取り組みに期待するところである。筆者が関心を抱いた発表として、他に、地下鉄サリン事件における聖路加病院スタッフのクライスマネージメントがあった。クライスマネージメントは、その性質上警察や軍の活動に関するため、こうした事例調査の発表は数少ない。原因が不明の段階で搬入されてきた地下鉄サリン被害者に組織としての病院として、また個人としての医師としてどう対応したのか、さらに対応を可能にした要因の分析は、リスク研究に対し新たな着眼点を提供しうるものであった。

食の安全とリスク管理に関する企画セッションでは、食品購買行動の要因分析、食中毒の原因となる微生物感染の定量的リスクアセスメント、欧州におけるダイオキシン類規制の動向等広範な分野からの発表が行われた。当セッションは今回初めての試みであったにもかかわらず、聴講者が多数おり、突っ込んだ議論が行われたことから、食品の安全に関する研究への関心が高いことが伺えた。当研究所からは、筆者、嘉田研究員がそれぞれ報告を行っている。